



学長メッセージ

鹿児島大学学長 前田 芳實

鹿児島大学は、大学全体の羅針盤というべき、鹿児島大学憲章と鹿児島大学学生憲章を前面に掲げ、自主自律と『進取の精神』（困難な物事に果敢に挑戦すること）を有する人材を育成し、学問の自由と多様性を堅持しつつ、地域とともに社会の発展に貢献する総合大学を目指しています。

また、『鹿児島大学の約束』（第2期中期目標）において、地域社会を担う高度専門職業人や研究者等の育成をめざした大学院教育の質の向上を図り、グローバル化の進展に対応した国際的に活躍できる人材の育成を掲げています。

臨床心理学研究科では、2010年度から2012年度に渡り「地域支援の臨床実践と実務教育を架橋した新たな『実践型教育プログラム』の開発」に取り組み、こころの健康への地域貢献を目指してまいりました。県内離島を含む広範囲の支援活動は、各地域から好評をもって迎えられ、1,000名を越す方々が参加されました。この「地域支援プロジェクト」は、今年度も特別経費によって継続的に発展しています。

また、臨床心理学研究科では、付設の心理臨床相談室において発達障害に関する心理相談など年間1,000名超の方々に心理的支援を行い、専門職大学院支援室を通じて「地域支援プロジェクト」が地域の専門家や行政機関などと連携・協働を試みているところです。こうした試みを通して得られた知見をもとに、現在は学際的な研究として「発達障害児・者に対する地域の初期支援力向上を目指した臨床心理学的教育・研修プログラムの開発」へ向けた発展的な努力を続けています。2008年、2009年度の専門職GP「臨床心理実習における客観的評価方法の構築」で、先駆的な実践教育研究を行ってきた本研究科は、自律学習能力を備えた学生教育という点で着実に成果を挙げています。

鹿児島大学は、豊かな自然とアジアの玄関口ならではの豊かな文化、日本の近代化を推進してきた歴史的伝統をもつ地域にあります。こうした環境、特性を十分に活かし、新時代や地域の抱える課題に対して、本プロジェクトが全国168校の臨床心理士養成大学院のリーダー的存在に相応しい解決型モデルを提供すると共に、地域の皆様の心の健康に貢献できるよう心から願っております。

研究科長メッセージ

プロジェクト総括／鹿児島大学大学院臨床心理学研究科長
松木 繁



鹿児島県は本土最南端に位置し、数多くの離島を含む広大な面積を有する県です。本県の特性を踏まえた、臨床心理学的援助方法や支援システムの導入、さらには学際的な『実践型教育プログラム』の開発は、喫緊の重要課題といえるでしょう。

「地域支援の臨床実践と実務教育を架橋した新たな『実践型教育プログラム』の開発」、私たちは「地域支援プロジェクト」と呼称していますが、これまで3年間の成果を年度報告書としてまとめ、日本心理臨床学会において4本の研究発表を行ってまいりました。本プロジェクトは、臨床心理士養成に特化した専門職大学院である我が研究科の「地域文化を視野に入れた心理臨床ができる人材を育成する」という教育理念を具現化するものです。ユニークな臨床心理地域援助モデルとの高い評価を内外でいただき、概算プロジェクト研究として終了した後も、学長からの教育支援経費を受けて、新たな『実践型教育プログラム』の開発に向けてさらに研究を継続しています。なお今年度の報告書は、地域との連携を目指すという本プロジェクトの趣旨に則り、より具体的な「見える化」を目指し、写真や表を使用するなどの工夫をいたしました。

本報告書では、第1章では今年度の事業の概要、第2章では臨床心理における地域支援活動と題して、各地域における支援活動の内、特色豊かな活動を中心に報告しています。本研究のモデル地区である伊佐市においては、講演会や就学時検診、そして就学相談会を中心に行政と連携して展開してきた臨床実践とそれに関わる実務教育の方法を報告しており、霧島市においては子育て支援と発達障害児の早期発見を重要課題として、保健師との協働等について報告しています。鹿児島市、南さつま市、那覇市、宮古市の地域支援の実践報告が続き、実践に対する参加者へ向けたアンケート評価も併せて報告されています。

第3章では、MICT（Mobile Information and Communication Technologies：携帯情報伝達技術）を活用した実践型臨床教育の実際を紹介しています。今年度の実践は、昨年度までのMICT活用で明らかとなった①「可視化された事前学習」②「共同参加型チュートリアル学習」③「参加型学習によるリアリティの向上」の教育効果に注目し、学内実習（心理臨床相談室）とのコラボレーションを試み、今後の発展の可能性を検討したものです。

第4章では、学生の「自己学習する力」をいかに高めるかという「セルフ・ラーニング」という新たな教育課題に沿って、本研究科が開発した客観的実習評価システムと、地域支援プロジェクトで導入した教育課程が、総合的に発展していく可能性について説明いたしました。

こうした実践を通して得られた成果を基に、今後もより洗練された臨床実践教育プログラムとして発展させたいと願っております。読者の皆様には忌憚の無いご意見をお寄せ頂ければ幸いです。